

INSIGHTOUT
special session

Life After 3.11

[時系列調査に見る価値観変化と暮らしの進路]

生活総研

本レポートの概要

博報堂生活総合研究所では、震災による生活者と普段の暮らしの変化を浮き彫りにするために、通常は偶数年に行っている長期時系列調査「生活定点」を、今年の5月にも臨時で実施し、日常生活の意識や行動に関する約1500問への回答について2006年から時系列比較しました。さらに、震災後の行動や考え方の変化に関する「生活者の声」調査も実施。これらの調査・分析から、震災後の価値観変化と暮らしの進路に関して、7つのFindingsを導き出しました。

臨時生活定点2011／生活定点2006～2010

調査地域 首都40km圏、阪神30km圏、名古屋40km圏

調査手法 訪問留置き調査

調査対象 20歳～69歳までの男女
2011年 2,355人（※2011年は震災による臨時調査）
2010年 4,094人
2008年 4,072人
2006年 3,974人
国勢調査の人口構成比で割付

質問項目 1,448項目

調査時期 偶数年5月（2011年5月16日～6月13日）

企画・分析 博報堂生活総合研究所

実施・集計 株式会社 東京サーベイ・リサーチ

[生活者の声]調査

調査地域 全国47都道府県

調査手法 インターネット調査

調査対象 20歳～59歳までの男女 6,000人
国勢調査の人口構成比で割付

質問項目 「東日本大震災後、ご自身や周囲の人々の考え方や行動は、
どのように変わりましたか？
変わったと思う理由もお教えてください。」
上記質問に対して、7,785件の回答を得た

調査時期 2011年5月9日～5月11日

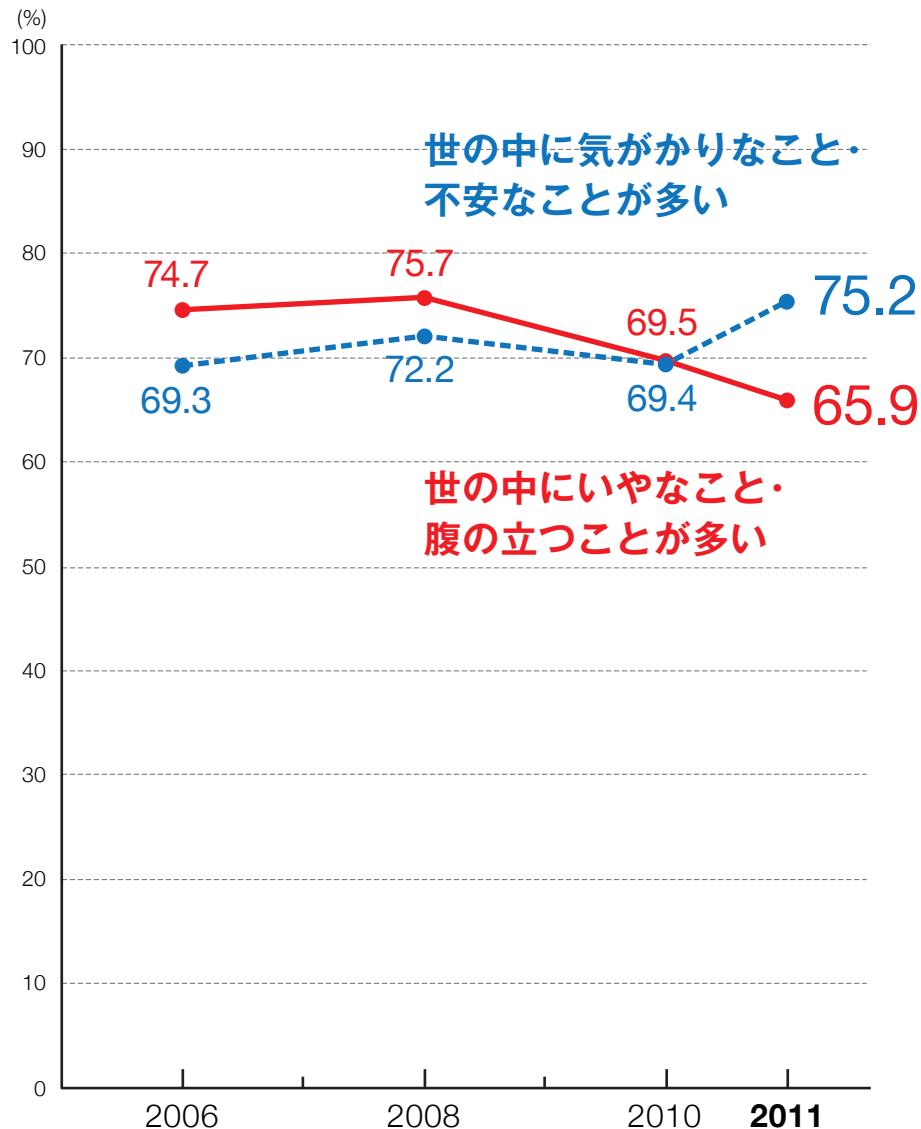
企画・分析 博報堂生活総合研究所

実施・集計 株式会社 東京サーベイ・リサーチ

7つのFindings

1. 不安は増えても、不満は言わない
2. 社会のために役立ちたい
3. 住まいを防災基地化
4. 60代でデジタル・エントリー増加
5. 親しき仲でも、べったりしない
6. 自力なくして連帯なし
7. 高まる「自分の責任」意識

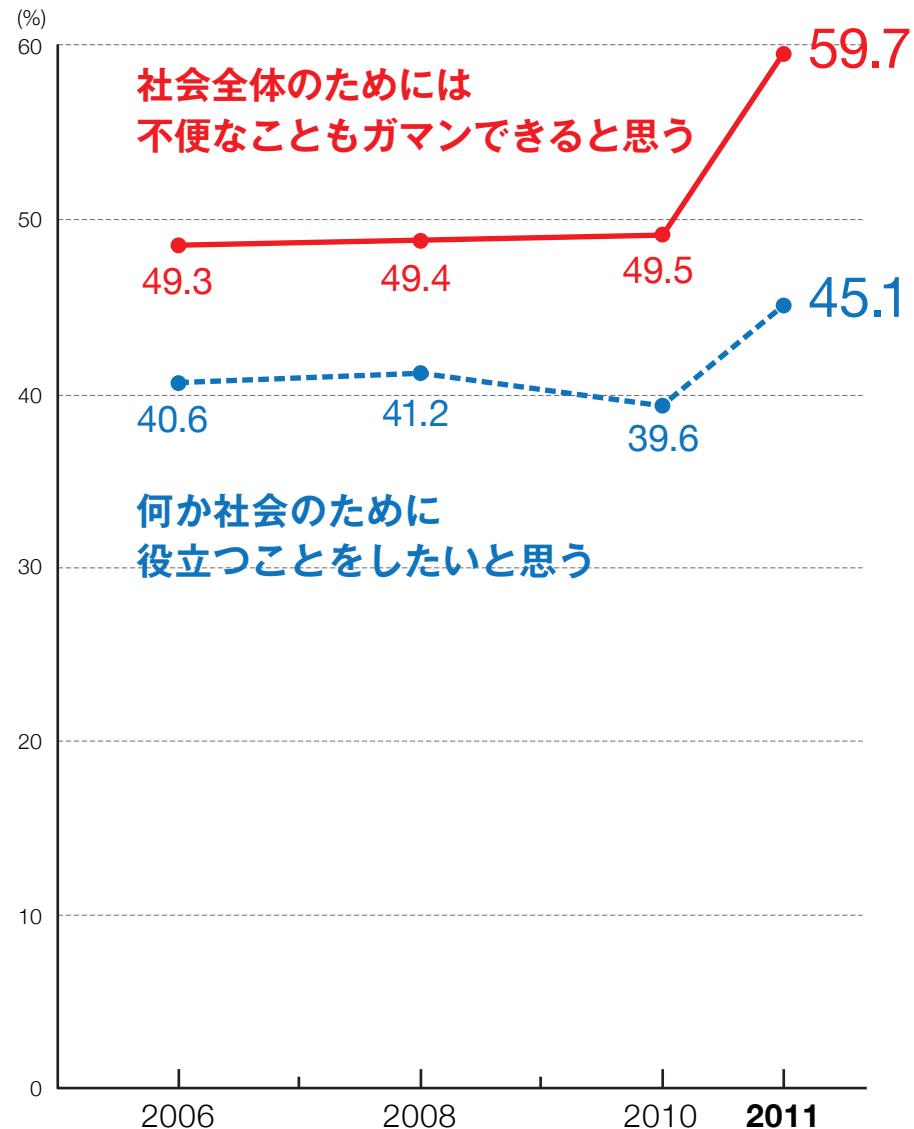
1 不安は増えても、不満は言わない



震災後の2011年、「世の中に気がかりなこと・不安なことが多い」と感じる人が急増。逆に、「世の中にいやなこと・腹の立つことが多い」と感じる人は減り、2つの項目の上下が初めて逆転しました。生活者の声では、「不安だが腹が据わった」「文句を言わずに生活する」といった意見も挙がっています。不安は増えたが、不満を言わず、現状をたくましく受け入れようとする生活者の姿が伺えます。

生活者の声

- 震災の影響の長期化で、これまでより不安に感じる出来事も多かったが、それ以上に腹が据わった面もあると思う。(46歳女性・山梨県)
- 文句を言わずに生活するようになった。(52歳女性・福岡県)
- 被災して苦労している人たちががんばっているから、ちょっとくらいの不便は苦にならなくなった。(36歳男性・兵庫県)

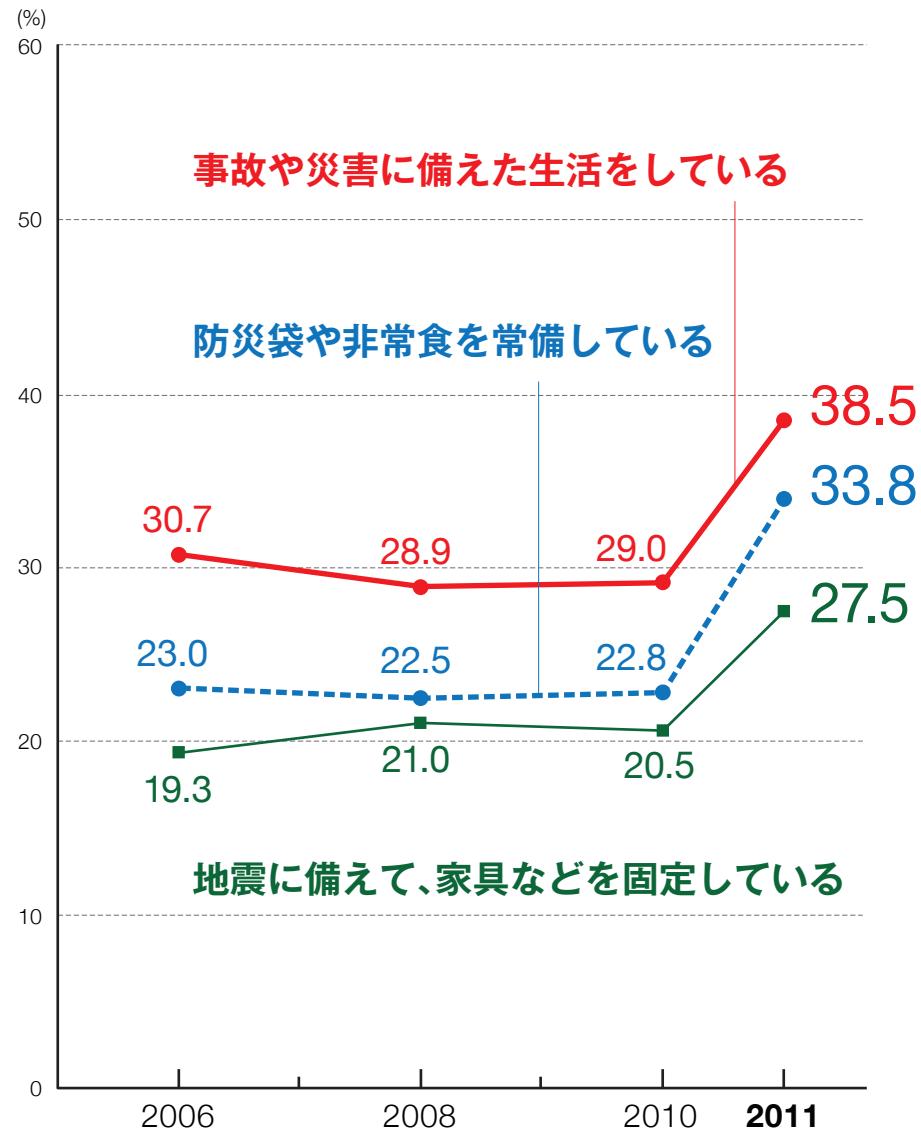


2006年から、ほとんど動きのなかつた「社会全体のためには不便なこともガマンできると思う」「何か社会のために役立つことをしたいと思う」が、ともに震災後に大きく上昇。また、生活者の声でも“社会のために役立つことをしたい”といった内容の意見が多く挙がっています。震災によって、社会全体として取り組むべき課題があらわになったためでしょうか。一人ひとりが自分の役割を主体的に創ろうとしているようです。

生活者の声

- 人の役に立つ仕事がしたい。社会の中での自分の役割を実感したい。
(27歳女性・兵庫県)
- 主催者となり、募金活動を行った。やらなきゃ！と使命感を感じた。
(24歳男性・沖縄県)
- 光熱費や食材など無駄をなくし、寄付できるものを購入するようしている。
(47歳女性・大阪府)
- 働くことが少しでも復興に繋がる気がする。
(52歳女性・富山県)

3 住まいを防災基地化



2006年以降、変化が見られなかった防災関連の項目も、震災後には大きく上昇しました。防災意識の高まりは、「地震への対処を常に考えるようになった」といった生活者の声にも見られます。震災後、人々の心の中に“自分の身は自分で守る”といった構えが生まれているようです。

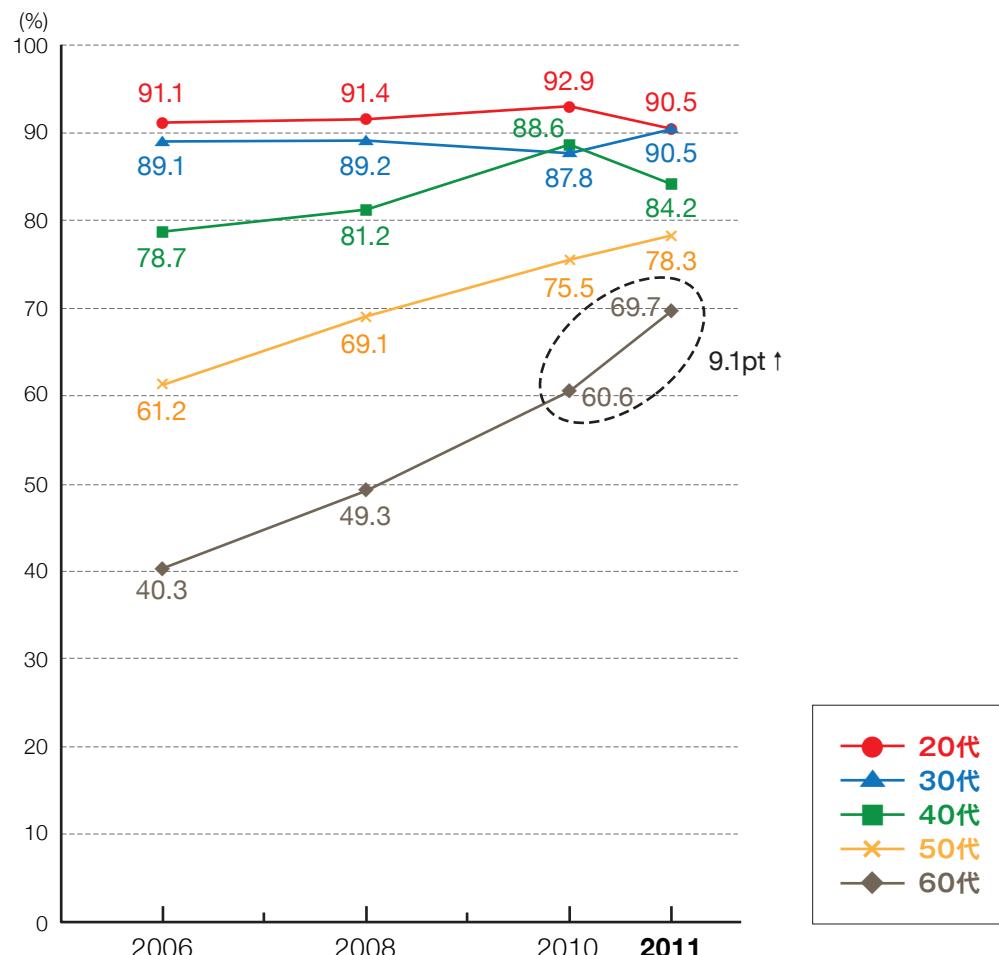
生活者の声

- 緊急時の家族との集合場所や持ち出し品を確認するようになった。
地震への対処を常に考えるようになった。(28歳女性・愛知県)
- 安全に対する考えが変わり、まず自分で自分を守らなければならない。
(55歳男性・静岡県)
- このままではいけない、最低自分は自分で守る。
(46歳男性・東京都)

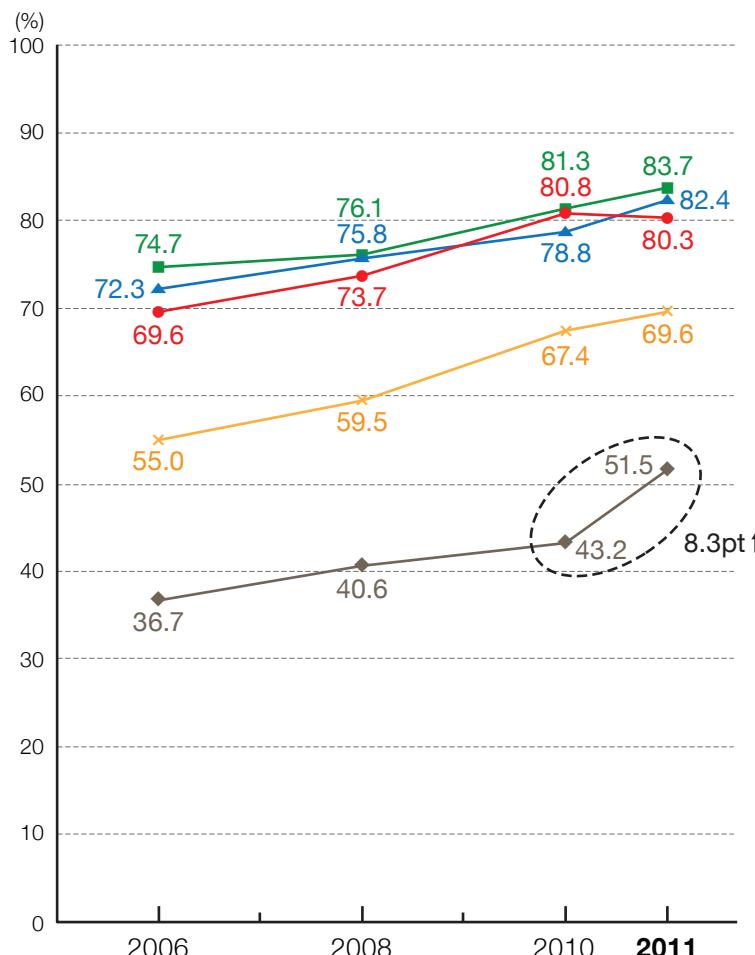
4 60代でデジタル・エントリー増加

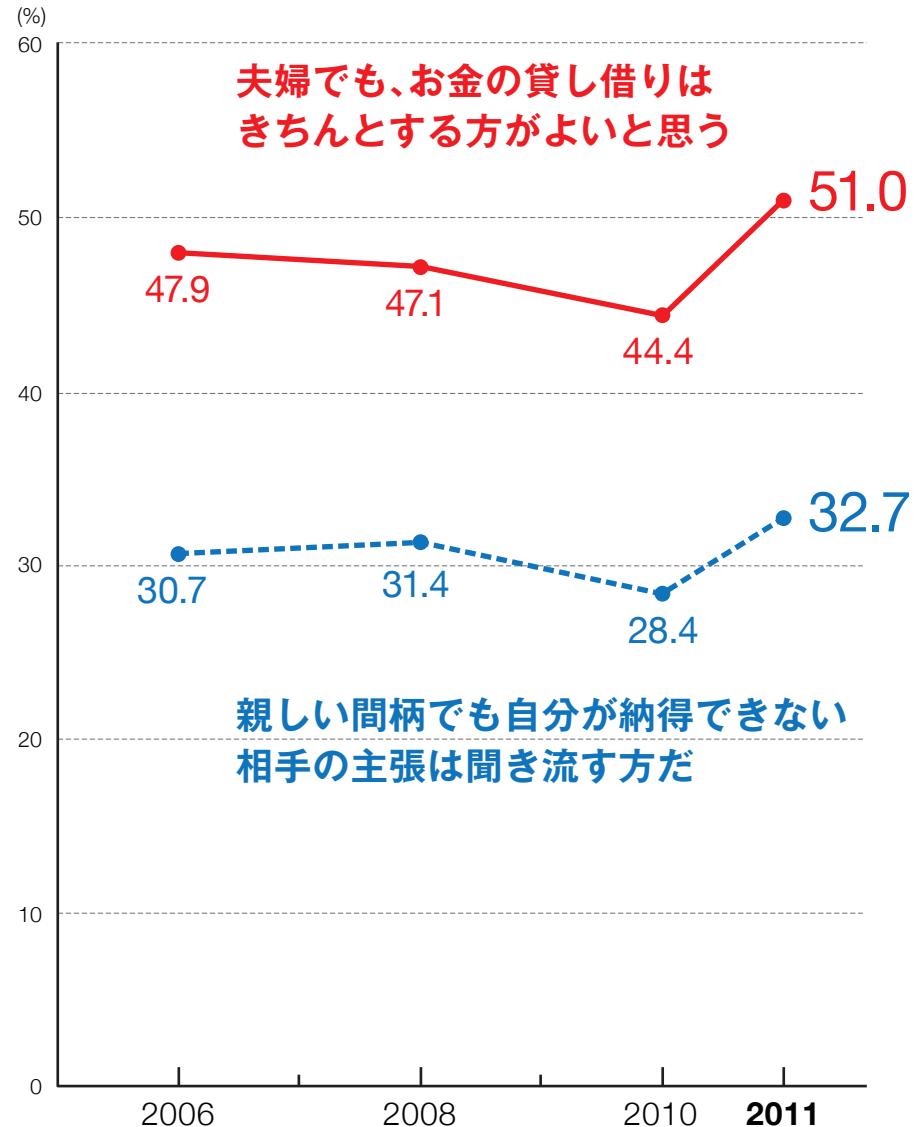
「携帯電話やパソコンなどでメールをする友人がいる」は、20-40代では2006年から大きな変化が見られないのに対し、50代以上は急増。特に、60代は震災前後で9.1ポイントも増えました。同様に、「(最近1年間)家庭でパソコンを使った」も60代が震災を挟んで8.3ポイント増加。緊急時の連絡や情報収集にも役立つデジタル機器や情報装備。シルバー層も自分の身を守るために取り入れ始めているようです。

携帯電話やパソコンなどでメールをする友人がいる



(最近1年間)家庭でパソコンを使った



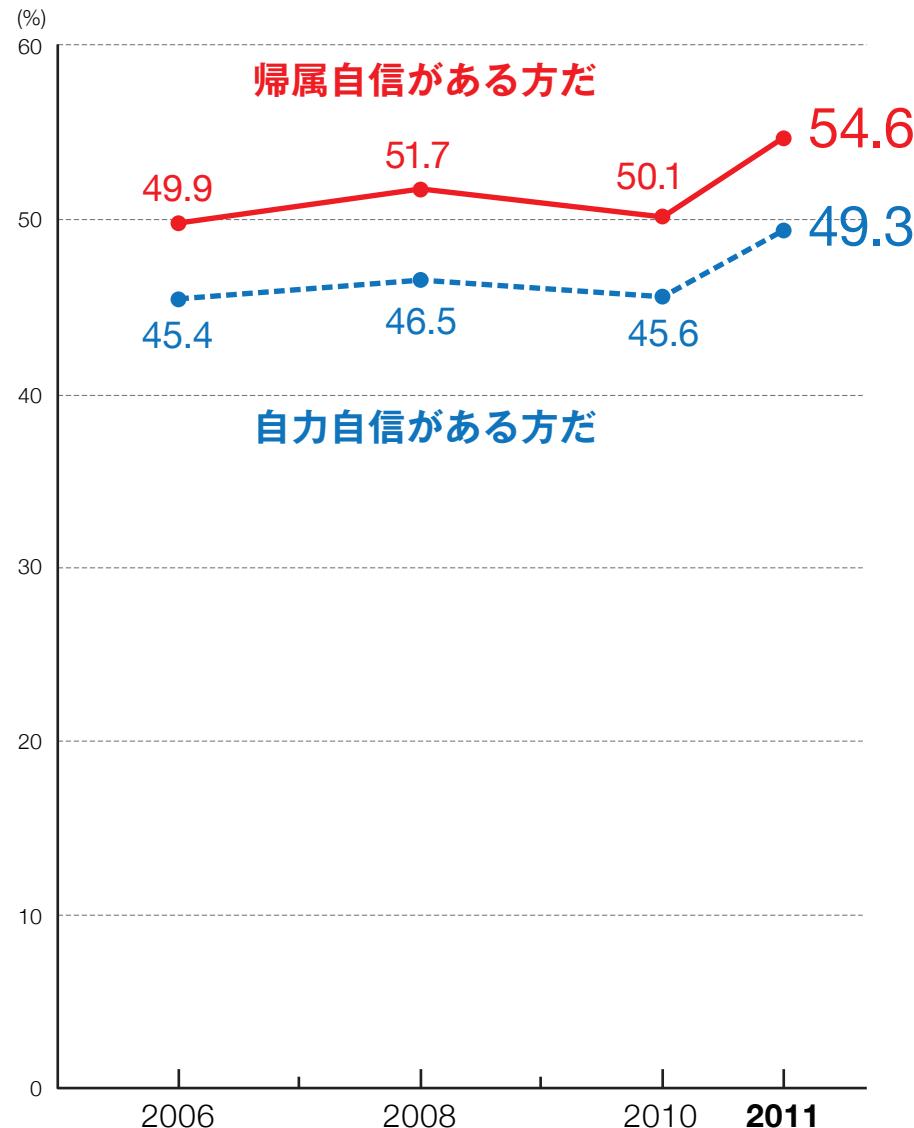


2006年から下降傾向で、震災前の2010年に過去最低だった夫婦と友人に関する項目が、いずれも震災後に増加に転じました。その他にも「人の価値観が見えるようになった」「良い面も悪い面も目立った」という声も挙がっています。価値観や本音が浮き彫りになつたことがきっかけとなり、人間関係の見直しが始まっているようです。

生活者の声

- 被災地支援を第一に行動する人もいれば、近づきたくないと言い切る人もいる。どちらがいいとかは思わないけれど、人の価値観が見えるようになった。(39歳女性・東京都)
- 社会が混乱したから、他人の良い面も悪い面も目立つた。(42歳男性・愛媛県)
- 夫が「もしもの備え」に無関心とわかり、自立の必要性を感じた。(45歳女性・愛知県)

6 | 自力なくして連帯なし



「自力自信がある方だ(自分の力を信じることで生まれる自信)」、「帰属自信がある方だ(何かに属することで生まれる自信)」はともに、震災前は横ばいでしたが、震災後に増加しました。人々は孤立ではなく、自力で立てるものどうしのつながりへと向かっています。ムードとしての連帯感とは異なる、新しいつながり方が生まれているようです。

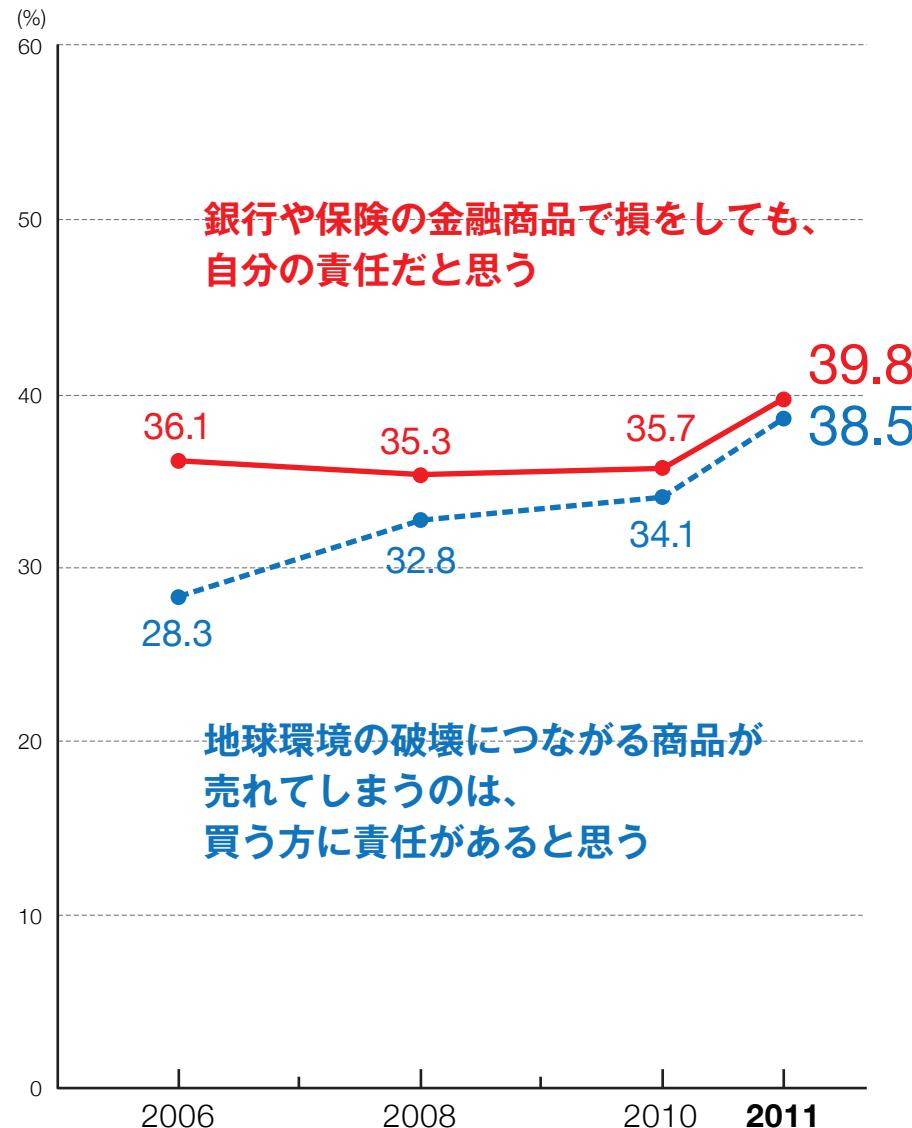
生活総研 [オリジナル尺度]

【自力自信】

知力、体力、経済力、仕事や家事のスキル、社交力など、自分の力を信じることで生まれる自信。

【帰属自信】

勤務先、家族、クラブ・サークル、地域社会、国など、何かに属することで生まれる自信。



自己責任に関する2つの項目が震災後に増加、ともに4割弱で過去最高となりました。生活者の声では、「自分で情報を収集」「自分で調べる」など“自分基準で情報を選ぶ”といった内容の回答も目立ちました。人々は自分の基準と判断を信じて動き始めているようです。

生活者の声

- 自分で情報を収集し、自分で判断。(39歳男性・愛知県)
- 事故などが起こってからでないと知らされないことが多いと感じ、自分で調べるようになった。(43歳女性・三重県)
- あちらでよいと言っているかと思えば、こちらでは悪いと言っている。発信元をよく確かめて正確だと思える情報のみ参考にする。(45歳女性・埼玉県)

7つのFindingsから見えてきた、3.11以降の生活者が目指す生き方

オペレーション じぶん

《自分で自分を運営する》

長期時系列調査による震災前後の意識・行動の分析から、
生活者は不服を言わずに、今の現状をたくましく、受け入れようとしていること、
また、自分の身を自分で守りつつ、社会における自分の役割を創ろうとしていること、
自分の基準・判断・責任で動き、自立した個として人とつながろうとしていること、が見えてきました。

このような変化が指し示す、3.11以降の生活者が目指す生き方を
「オペレーション じぶん《自分で自分を運営する》」と捉えました。

本件に関するお問合せ

株式会社 博報堂 博報堂生活総合研究所
<http://seikatsusoken.jp/>
TEL.03-6441-6450 (夏山／吉川)

株式会社 博報堂 広報室
<http://www.hakuhodo.co.jp/>
TEL.03-6441-6161 (藤井／山野)



HAKUHODO